

## コミュニケーションは諦めずに……

あるメル友から次のようなメ - ルが入った。

【 ボランティアの後輩が、就職の相談に友達とやってきた。そのコは、聴覚障害のある男のコ。でも、すごく就職する雰囲気不安がある様子……。耳が聞こえないことから、周りのコミュニケーションにも自信がないようで、苦手だと言っていました。

やる気と今、持っている自分の良いところを生かしていくことが必要なことを話した。確かに、耳が聞こえないことからの不安は大きいと思う。でも、良いところをみんな理解してもらうことも大切と思った。

今日、話をしたことがためになったのかはわからないが……。意欲的に自分のやりたい道に進んでほしいなあと思う。 】

こうした話に繋がるかと思うことがある。障害児を育てる親御さんと話していると、「やはり障害児の親の気持ちは、持たない人には解らないだろう」とか、「云いたいことの半分も云えない」とよく聞く。私は、「全てが理解できないのは、当然！ だから、共通する障害児問題としてコミュニケーションを続ける必要があるのではないかな？」「どうせ解らないだろう」では、コミュニケーションの必要性はなくなる！」、また、「親が云わないで、最終的に辛抱し諦めることになるのは誰なの？ 子どもではないの？」と尋ねている。

男であること、女であることもその人の一つの属性に過ぎないことと同じように、先の学生のことで言えば、耳が不自由というのも、その学生の一つの属性に過ぎない。障害児を育てる親のことで言えば、家族に障害児がいるということも、家族という一つの属性に過ぎない。それ故、一つの属性のために社会生活に不自由を被っているとしたら、それこそ、社会の責任において改善していかななくてはならないこと！ それには、当事者側からの発信、またコミュニケーションを諦めないことが、周りに気づかせ、理解を促すことになると思う。

社会云々と同時に、障害者本人、家族が、自らの全体像を観ていく(生きていく)には、その一つの属性に自らの全体像を縛って考えないで、その思考の縛りから自らを解放し発信することがまず大切でないかと思う。

それがメル友のいう『やる気と、今持っている自分の良いところをいかしていくことが必要なこと』だろうし、『意欲的に自分のやりたい道に進んでほしい』ということだとも思う。

“ People with disabilities are people, first. ”

( 2004 年 12 月 6 日 記 )